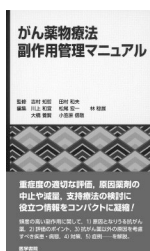


書評

[評者]
中島貴子

聖マリアンナ医科大学教授・臨床腫瘍学



がん薬物療法 副作用管理マニュアル

吉村知哲, 田村和夫 監修
川上和宜, 松尾宏一, 林 稔展,
大橋養賢, 小笠原信敬 編

●B6 変型 頁314 2018年3月
定価：本体3,800円+税
[ISBN978-4-260-03532-3]医学書院刊

がんに対する薬物療法は急速に進歩している。

従来の殺細胞性抗がん薬に加え、分子標的治療薬、さらに近年では免疫チェックポイント阻害薬も数多くのがん腫で使用可能となっている。それぞれの単剤での使用だけでなく、併用療法ではカテゴリーを超えた薬剤同士の組み合わせが治療成績のさらなる向上を可能としている。しかしそれは同時に多様な副作用に対応しなければならないことを意味する。

副作用管理に関する著書は多く存在する。がん薬物療法に従事し始めたばかりのころは、その類をたくさん購入し、外来・病棟での診療中に大変お世話になった。しかし実際の医療現場には著書だけでなく先輩の医師がいて、問診、病態のアセスメント、原因の特定と対策など、豊富な経験に基づいたアドバイスに多く助けられたものである。今ではがん薬物療法の領域ではチーム医療が急速に進み、そのような役割はむしろ薬剤師や看護師などのメディカルスタッフがこなしている場合も多いのではないだろうか？

本書の最大の特徴は、「抗がん薬以外の原因を考慮すべき疾患・病態」にまで目が向けられていることであ

ろう。症例提示においても、「抗がん薬の副作用が疑われた症例」と、「抗がん薬以外の原因が疑われた症例」の両者が示されているのは大変珍しい。「がん」を診察するのではなく、「がんを有する患者」を診察することの重要性が、本書においては一貫して伝わってくる。副作用に関する「辞書」を超え、チーム内で症例カンファランスをしているような感覚を与えてくれる。

もう一つの本書の特徴は、「執筆者が全て薬剤師である」ということではなかろうか？ 原因薬剤の特徴だけでなく、詳細な病状聴取のコツや、前述した副作用以外の可能性についての考察など、経験を積んだ腫瘍内科医が読んであらためて自身の診療の不足を再確認させられる内容を薬剤師が執筆している。日本のがん薬物療法におけるチーム医療がいかに進歩したか、強い感動を覚えるとともに、彼らのポテンシャルの高さにがん薬物療法の頼もしい未来を感じる。

目の前の多彩な病態を持つ個々のがん患者に対するとき、職種を超えて役に立つ、自信を持ってお薦めする良著である。